

「大腸内視鏡挿入法—ビギナーからベテランまで」

秋田赤十字病院胃腸センター 工藤 進英 著

京都がん協会

多 田 正 大

本書の執筆者・工藤進英博士は現在の大腸内視鏡学を活性化させている最大の功労者の一人であり、IIc型早期大腸癌で世界に華々しくデビューした気鋭の研究者であることは紹介するまでもない。学会等で主張する工藤氏の診断理論は、頑ななまでの信念と自信に裏付けされたものであり、常に共感を呼ぶところが多い。

その工藤氏が医学書院から「大腸内視鏡挿入法」なる純粋のテクニクに関する書籍を刊行したが、私にも早速、熟読する機会があった。長い序文とあとがきに本書にかける著者の情熱のほとばしりが感じられるが、X線を必要とせず、内視鏡だけで大腸癌の診断理論を確立したいという氏の積年の理念を完成させるためのステップとして、工藤流挿入手技を世間に広めるために企てた書籍である。

大腸に限らず、とかく内視鏡手技をマスターするには活字を読むよりも、ベテランの手技を実際に見学することが近道である。日本消化器内視鏡学会でも機会あるごとにビデオを活用した実技セミナーを実施して、会員のテクニクの普及・向上に努めているが、あえて活字で挿入手技を伝授しようとしたところに、筆者の並々ならぬ自信と意気込みが感じとれる。私が同様の企画を考えるなら、ためらわずに video & book の形式をとるところを、あえて理解に不利な活字を選択したところに興味があり、一気に本書を通読してしまった。

本書の第一印象は、大腸鏡の挿入

に関して頑なな信念を貫いた手引書である、というところであらうか。工藤流の大腸鏡挿入手技の秘伝・真髄である“軸保持短縮法”を中心に記載されたものであり、ビギナーをターゲットにした入門書であるとともに、自らの手技を確立したベテランにも一人挿入法の良さを再認識させる内容となっている。まさに本書の副題である“ビギナーからベテランまで”を実践した構成となっている。また読者のレベルに応じた研修ステップを明快に示しているところに本書の特徴がある。コラムなども豊富に取り入れて、さりげなく読者に工藤流の真髄を伝授しようとする意図が見事に結実している。痒いところにまで手が届くようにした著者の気配りを感じとれ、好感の持てる書籍に仕上がっている。

軸保持短縮法とは何か、読者の疑問は本書を通読すればたちまち氷解するが、本書が経験の乏しい初心者にとっても理解しやすい理由はイラストの巧みさによるところが大きい。聞くところによると作画の才能あるお弟子さんの協力も得て完成したとのこと、見事な出来映えである。活字では理解しづらい手技を表現するのに、まさに的を射たイラストであり感服させられた。

さて私自身の挿入手技は本書では糾弾されている二人法であるが、正確には工藤氏の考えているような手技ではないことをこの機会に述べておきたい。私の二人挿入手技の基本も、表現こそ違え、本書で繰り返し述べられているごとく、ループを少なく直線的に挿入するように努め

るものであり、一人で操作するか二人で行うかの単純な違いにすぎない。したがって和痛対策のための前投薬は一切用いず、多くのケースでは苦痛もほとんどなく、3～5分程度で回盲部までの挿入ができる。他のベテランが本書を読んだ感想は後日伺うにして、挿入手技の基本に関する限り本書で強調されているような違いは少ないのではないかと感じる。

colonoscopy の手技に関する書籍は既に新谷弘美、神保勝一、岡本平次氏などの名著があり、いずれも高く評価されている。本書が前著を乗り越えるものであるか否かは、本書を読んだ読者の何人が工藤流に共感を覚え、その手技を導入して colonoscopy の達人に変身できるかにかかると。これからの colonoscopy が楽しみである。

書評を締めくくる言葉として、“本書は座右の書として……”という称讃の言葉が述べられることが多い。しかし本書に関する限りそのような表現はふさわしくない。百科事典のごとく座右に飾り置くのではなく、検査ベットの脇に常備しておく、挿入に困ったときにはためらわず頁をめくり、文字通り糞にまみれながら活用しなければならない書籍であろう。

● B5 頁134 図20 写真3
カラー写真78 原色図3 2色図34
表3 1997 定価(本体12,000円+税) ¥400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)